ウエルハーネスだより

２２０号

上尾市向山１－14－7
社会福祉法人　竹柿会
TEL：048-782-0575
FAX：048-782-0590
令和６年９月25日発行

理事長からのことば

朝夕は涼しくなってきたものの、日中の暑さはまだ真夏並み。よく暑さ寒さは彼岸までといいますが、10月にならないと涼しくならないのではと思います。

さて、今月は14日の『朝日新聞』be on Saturday の連載『認知症と生きるには』の「40代で認知症になった父」を紹介します。筆者は、精神科医の松本一生先生です。

認知症をはじめとする脳やメンタル系の病気は、人に伝える際に大きな抵抗があるものです。それを克服して自らの状況を子どもに伝えた若年性認知症の人の話です。今回も個人情報保護のために事実の一部を変更し、仮名で紹介します。

十数年前、当時 41 歳だった三井隆夫さんは、会社の健康診断の結果、産業医から「物忘れ外来」への受診を提案されました。「認知力の低下がある」と言われても、ひとごとのように聞こえました。受診した大学病院では「あなたはアルツハイマー型認知症の初期です」と告知されました。

大学１年生の娘と、高校２年生の息子がいました。妻はショックを受けましたが、前向きに生きるためにパートの仕事に就くことを提案してくれました。

若年性認知症には特徴があります。若いため病気が急速に進行する場合がある▽職を失うかもしれない▽子どもの学費がかかる▽自分が社会から「必要のない存在」ととらえられてしまうことへの恐怖です。

隠し通せることではありません。しっかり事実を伝え、子どもたちにも覚悟をもって対応したいと夫婦は考えました。

診療と家族支援を引き受けることになった私のもとに夫婦で何度か来院しました。通院が半年ほど続いたころ、三井さんが私に聞きました。「先生なら子どもに伝えますか」

事実を伝えたうえで、できる限りのサポート体制をつくること、そして安心感があれば、認知症は急激に悪化せず、むしろ若く体力があるために悪くなるのを遅らせることができると伝えました。次の診察に三井さんは来ませんでした。

しばらく後、三井さんは来院して言いました。

「先週、ふたりの子どもに話しました。子どもたちも信じられなかったみたいでしたが、やっと昨晩、家族の方向性を出すことができました」

子どもたちはこう言ったそうです。「私たちのことを心配してくれるのはありがたいけど、何でもきめてしまうのはやめよう」「希望を持って、何かが起きた時にはしっかりと向きあえばよいと思う」

事実と向き合い、それを告げるには大きな勇気が必要でした。恐怖と向き合う姿を見せたからこそ、子どもたちも真剣に向きあってくれたのだと思います。

家族は闘いました。絶望にあらがう姿ではなく、希望を失わなかった彼らの勇気が見えました。

こんな前向きな素敵な家族がいるんだとうらやましく思いました。自分自身を振り返ってみると、両親は癌で亡くなりました。私が若かったせいもあるのですが、特に言葉を聞くことはなかったです。今は、私が語る立場にいるんでしょうが、ここまで真剣にお互い言えるかというとどうかなという気がします。三井さんのお宅は、日ごろどのような親であり、家族だったのだろうかと知りたくなりました。とても良い記事だと思います。

９～１０月の行事

９月 21 日に備前太鼓の演奏会がおこなわれました。

敬老の日の記念として、特養ではお饅頭・靴下・表彰状をお渡しさせていただきました。デイサービスではお饅頭・お米２合をお渡しさせていただきました。

９月 16 日に敬老の日の行事食としてお赤飯・すまし汁・うなぎの蒲焼き・天ぷら・炊き合わせ・フルーツ(梨)を召し上がっていただきました。

１０～１１月の予定

デイサービスでは、磁石を使った制作やハーモニカのボランティア様にお越しいただく予定になっております。

特養では、さまざまなレクリエーションを企画しております。

特養：敬老会

デイ：制作・お月見ゲーム

備前太鼓演奏会

敬老の日　行事食